

水平社創立100年

人間の尊厳や平等を求めて結成された「全国水平社」の創立から100年となる今年の3月3日に、「水平社博物館」がリニューアルオープンしました。漫画やアーティストのCDを用いるなど、水平社の理念を分かりやすく伝える展示も行っています。今回は、水平社博物館館長の駒井忠之さんにお話を伺いました。

■水平社博物館との出会い

思春期の頃ぐらいから、なぜ自分が部落に生まれたのか非常に悩み、否定的に考え、解放研などにも参加していませんでした。ただ、小学校や中学校時代は、学校の先生方が中心になって勉強を教えてくださいな補充学級には参加していました。自分と同じような境遇の仲間がいて安心感があったのですが、周りにはあまり知られたくない気持ちもあり、色々葛藤していた時期でした。

大学に入ってから、あまりそのような姿勢は変わらなかったのですが、博物館の建設の準備をしていた段階で資料の整理を守安前館長が一人でされていたとき、補充学級でお世話になった先輩の紹介で手伝うことになりました。アルバイトで資料の整理を大学の一回生のときから始め、ここで働かせてもらっている経歴は長いです。守安さんは元高校の教員でもあり、部落問題について知識も理解もある方でしたが、そういう人に出会ったときにも、僕は部落問題や部落差別という言葉聞いたときに下を向き、顔を上げずに消極的な態度を取っていました。「あまり触れられたくないなあ」という感じでした。ただ、守安さんやリバティおおさか（大阪人権博物館）の朝治館長との付き合いの中で、お二人は、部落問題や部落差別のことを重苦しく捉えるのではなく、あまり深刻に考えても解決しないという雰囲気、割と日常的にそういう問題を会話に出されていました。僕は差別や人権問題を暗くて重苦しいものと思っていましたが、話を聞いていると、徐々に、自分が考えていた重いものを軽くしてもらってきたようで、あれっという感じでした。自分が今までこだわってきた、避けようとしてきた、部落出身だというネガティブに捉えていた考えが、取るに足らないことだと思わせてくれ

たのは、守安さんたちとの出会いでした。大きな転換点でした。同じような思いをしている人たちがいるなら、「人権というものは明るいものだ、みんなが幸せになるために持っている権利なんだ」という認識を共有していたらいいなと思い、博物館に就職しました。

寛容な守安さんの心のおかげで、自分の持っていた氷の心が解かされていって、今思えば水平社宣言の精神にも通ずるところだと思います。もっと温かみがある社会になってくれば、もっと人々が幸せになっていくと思います。

■学芸員として

僕が学芸員、守安さんが館長という関係のとき学んだことがあります。どちらかというとなら僕は何でも一人でやってしまおうとするのですが、守安さんは人脈がすごい。多様な人とのつながり、関係の中で、長所を活かし、短所を補い、よりよいものを完成させていく。企画展もそうですが、いろいろな人の意見や、専門分野の方の知識を取り入れる。このことは、色々なことに通じてくることであり、人とのつながりの重要性を学ばせていただきました。学芸員をする中で、部落問題以外の人権課題も企画展で取り上げさせてもらえて、そういう意味では差別というものの根源、根っこにあるものは同じだと思います。

■館長としての思い

館長になってからは、次の世代を育てていきたいと考えていて、今まで学ばせていただいた、人とのつながりの重要性、関係性を構築していくということを伝えていきたいと思っています。水平社博物館の学芸員になりたいという子どもが現れてくれることが夢です。博物館からの情報発信としては、水平社の人間



の尊厳や平等を求めていった理念をリニューアルの展示を通して、多くの人と共有していきたい、それが一番の思いです。

水平社の創立の理念や思想は、「差別をしてはいけない」というものではないのです。もちろんこの考えも大事なことです。実は水平社宣言には、「差別」という言葉が一回も出てきません。一番出てくるのは、「人間」という言葉で10回出てきます。脳科学の世界で、脳は否定形や禁止形を理解できない、と言われていています。例えば、野球なら、監督がバッターに、低めのボールは打ちにくいから手を出すなど、指示すると、バッターは低めを打ってはだめだ、と低めばかりに意識がいき、結局、低めのボールに手が出てしまうものです。むしろ、高めのボールを狙っていこうという表現の方が脳は理解できます。この理論と水平社の理論は似ています。差別をしてはいけない、というのではなく、人間を尊敬することによって、みんな差別を克服していこうという理念が水平社宣言では謳われています。肯定的、能動的なのです。差別という感情は、人間の本質的な負の感情だと思えます。これをなくし、ゼロにするのは難しいと思います。差別という負の感情を、人権を尊重する意識を高めることによって克服することができるということが、水平社の創立理念に近いと考えています。多様なアイデンティティを認め、多様な生き方を肯定していこうということが、水平社の理念だと思います。そういう理念や思想を博物館からしっかりと情報発信していきたい、それに共感してもらえると非常にうれしいです。

水平社が発信した綱領の一項目、二項目の

主語は「特殊部落民は」ですが、三項目の主語は「吾等は」とあります。つまり、「吾等は」には、差別、被差別を超えて「みんな」という意味が込められているのです。この三項目を具体的に表現したものが宣言です。被差別側、差別してきた側の両側が、人間を尊敬することによって、自身や相手の人間性や人格を肯定して差別を克服しようと。差別でへし曲げられてきた自分たちの自尊感情や自己肯定感をしっかりと回復していこうと主張したのです。ここで述べられた多様なアイデンティティを肯定していこうという思想が、様々な被差別マイノリティの共感を呼びました。宣言では、「吾々がエタである事を誇り得る時が来たのだ。」とありますが、「エタ」の部分例えば、「性的マイノリティ」と置き換えることができます。そういう思想を皆さんと共有していきたいということが、僕の思いです。水平社宣言は、日本初の人権宣言と言われ、また、被差別マイノリティが発信した世界初の人権宣言とも言われています。将来にも受け継いでいく財産です。日本国憲法にも、権利や自由は私たちの不断の努力で保持する必要があると謳われています。人権意識は、止まってしまうと後退してしまうので、歩み続けなければなりません。

誰か自分とは違う人の権利が侵害されているとき、もしかしたらそれは自分だったかも、と想像する力を持ち続けたいと思っています。私たちの共有財産である権利や自由は私たちみんなを守っていく、誰に対する差別も許さない、というこの反差別の精神も継承すべき水平社の思想でしょう。ロシアの侵攻によってウクライナの住民の命が奪われています。この最大の差別に大きな行動を起こすことは難しくても、戦争に反対するひとつの言葉が誰かの支えになることもあります。そうした想いを共有していければと思います。

プロフィール

水平社博物館 館長

駒井 忠之さん（表紙の人）